
運命のマスティマ ミシェル過去編

鏡 香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命のマスティマ ミシエル過去編

【Nコード】

N2842Y

【作者名】

鏡 香夜

【あらすじ】

十歳のとき、マフィアの抗争に巻き込まれた私。救ってくれたのはマスティマという闇組織。

恩を返すべく組織のコックを目指して、いざ修行開始！

料理習得のために国々を回る。世界は広くて、色んな人がいて……？

「運命のマスティマ」の主人公、ミシエルの修行時代、奮闘記。

（シリーズものですが、この話単独でも読める内容になっています）

1. あの夜

十年前の夜、父と私はマフィアの抗争に巻き込まれた。

父は小さな料理店の経営者にして唯一人のコック。そして、当時の私は、ようやく自分でおさげ髪を満足に結えるようになったばかり。若干十才の少女でしかなかった。

その夜は、貸切りの予約客がいて、私も顔見知りの人だった。

ウェイトレスの真似事を始めていた私は、大好きな父の手伝いをしたくて、無理を言って店に入り込んだ。

それがあんなことになるうとは……。

飛び交う銃弾。男達の怒鳴り声。弾けるガラス。テーブルは押し倒され、椅子も床に転がった。

何が起こったのか分からず、茫然と立ちつくしていた。私を守るために父は被弾した。

混乱した状況から私と父を救ってくれたのは黒いコートの人たち。それが闇組織マステイマだと知ったのは後になってのことだった。彼らは襲撃者を倒し、狙われていた人物を助け出した。

それがレストランの常連客だったブルーノさん。祖父の代から店に来ていたというこの人は、父とも親しかった。

「やあミシェル、元気かね」

こんな風に、子供の私にも気さくに話しかけてくれる、優しいおじさん。

黒い髪に黒い口ひげを生やし、お洒落にスーツを着こなしている。小物使いもさりげなく、シックだが存在感のある指輪をいつも身に着けていた。トレードマークのハットにステッキは見るたびに違うもの。

いつもスーツ姿の二人の男と一緒に店にやってきた。

そんな彼がイタリアでも指折りのマフィア、マロッチーニ・ファミリーのボスであることなんて知らなかった。

まだ十才だった私。知識なんてほんの狭い周りのことのみ。
父が撃たれた時もできたのは泣くことだけ。非力な子供でしかなかった。

父の店で襲撃を受けた夜のことは鮮明に覚えている。守られた私だけが無事だった。ブルーノさんやその部下達も銃弾を受け、同じ病院に運び込まれた。

鳴り響く救急車のサイレン、慌しく処置をする医師や看護師達。
病院の匂いや手術室の場所だって忘れていない。

父の手術は成功して、次の日の昼には意識を取り戻した。山は越えましたとの医師の言葉だったが、母は看病のために病院に泊まりこんだ。私は家に帰ったが、学校が終わるとすぐ祖母と共に見舞いに行った。

父の容態が急変したのは三日後のこと。

その時の記憶は、はっきりとしない。病院にいて、父のベッドに駆けつけたはずなのに。

悪い夢を見て、目覚めるとそれが何だったかを忘れてしまった時のようだ。

最初に気付いたのは祖母だった。なんの変哲もなく訪れた朝。ベッドから起きだして朝食をとり、いつもどおり学校に行こうとした私を引き止めたのが彼女だった。今日は葬儀の日だからとの言葉を私は啞然として聞いていた。

棺に移される前、病院での最後の面会で繋がった前日までと今。静かに横たわる父の姿を目にすると、涙が溢れて止まらなかった。父を失ってしまったという悲しきで押しつぶされそうになりながらも、私は自分の無力さを感じていた。同時に私のせいなのだという思いも募った。

私をかばって父は倒れた。一人だったら、裏口からうまく逃げ出せていたかもしれない。私が店にいなければ、死なずにすんだかもしれないのだ。

誰もそれを口にはしなかったけれど、その考えに至れないほど私は幼くもなかった。

憔悴した母の顔。いつもは、はつらつとして明るい人なのに。私を氣遣って笑顔を見せて話しかけてくる。子供ながらに苦しかった。変わらず接してくれる祖母にも心の内を話すことができなかった。祖母が責めたのはブルーノさんだった。葬儀にやってきた代理人の参列も許さなかった。

ブルーノさん自身はその時、まだ入院中だった。銃弾摘出のための手術が必要だったのだ。

術後一カ月、退院した彼は、すぐにうちにやってきた。杖をつき、部下に支えられながら。

だが、祖母は玄関先で箒片手に追い返した。周りが慌てるほどの辛らつな態度だった。

マフィアだろうとなんだだろうと祖母には無関係。祖父の友人でもあり、古くからの知り合いである彼に容赦はなかった。

それでもブルーノさんは何度も家にやってきた。父の死の責任を取ろうと、私の後見人を名乗り出た。

祖母は良い顔をしなかったが、私は彼の申し出に甘えた。家にて、彼女や母と顔をあわせていると辛かった。

父の死で、ぽっかりと心に開いた穴。それは彼女達にしても同じだったと思う。その時の私は自分のことだけで精一杯で、なにもできなかったけれど。

逃げるように屋敷にやって来る私に、ブルーノさんは優しくかった。事件のことは一切触れることはせず、毎回私が喜びそうなお菓子を用意して待っていてくれた。

マステイマの話はブルーノさんの前ではご法度だった。言葉を重ねるたび、空気が重くなっていくのを感じた。詳しく尋ねる事なんてできなかった。

こういう雰囲気になるのは、関わるなどの無言の圧力だ。マフィ

アや麻葉等の話も同じ。とたんにブルーノさんの声はずっしりとした石のようになった。

それは子供の私には、どんな言葉よりも雄弁なもの。

それでもマステイマへの思いは、ともし火のように、細くなることがあっても消えることはなかった。

彼らがいなければ、私もまた死んでいただろう。父にも短いが三日間という時間をくれた。その間に交わした会話の数々は今でも心に残っている。

今の私があるのもマステイマが来たからこそだ。あの夜の無力で脅えた私とは正反対の存在。

彼らに近付きたいとは思いつながらも、どうやったら関われるのか、分からずにいた。父を亡くして間もない心は沈みがちで、持ち前のきかん気も影を潜めていた。

慰めだったのは、ブルーノさんの屋敷の庭で、飼われているラッテという名のクリーム色のマステイフ犬と遊ぶことだった。余談ではあるが、このラッテは後にネーロとカフェラッテの母親となる犬だ。

がつしりとしていて頼りがいがあるのに、他ならぬ母性を感じさせる、この優しい生き物に私は救われた。

ブルーノさんが留守のときも庭に入れてもらい、ラッテと過した。ラッテは有能な番犬の一頭だった。

人に懐かせることに対して苦言を呈する部下もいたが、ブルーノさんは「あの子のしたいように」と許してくれた。

最初、受け入れてはくれなかった他の犬たちから、身を張って守ってくれたのもラッテだった。

彼女は私の守護者だった。膝を抱えて座り込む私の傍にいつもいた。二つの後ろ姿は、まるで二頭の犬のようだとブルーノさんは柔らかに笑ったものだ。

彼女の落ち着いた息遣いや穏やかに打つ心臓の音、私の頬を舐める柔らかい舌と愛情深い黒い瞳が大好きだった。

何時間でも辛抱強く付き合ってくれた。言葉など超えた理解がそこにあったように思う。

犬舎の中で寄り添ったまま眠ってしまい、そのまま夜を迎えて、行方不明になったと心配されたこともあった。

服を涎だらけにされたり、泥まみれになったり、母に眉を寄せられたことも一度や二度ではない。だけど、この時、私の支えだったのはこのラッテだったとはっきりと言える。

私は癒やされ、次第に父と共に失くした物を取り戻そうとしていた。

そんなときだった。自分の進むべき道を知るきっかけが訪れたのは。

それは自然でありつつも劇的な出会いだった。

1. あの夜（後書き）

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチ
ッとお願ひします（ランキングの表示はP Cのみです）

2. 魔法の国

庭に流れてきた刺激的で芳醇な香り。これはニンニクと唐辛子。源はきつとアーリオ・オーリオ・エ・ペロンチーノだ。

夕食前だった私のお腹が何よりも正直に反応する。その音に傍にいたラツテが驚いたほどだ。

お腹を押さえながら、そろりと地面から立ち上がる。

父も家でよく作ってくれたつけ。そのペペロンチーノの匂いによく似ている。私は引きつけられるように匂いの流れてくる窓に寄っていった。

窓の向こうには白衣の背の高い男の人。コックの姿だ。ブルーノさんより年配そうだが、その背筋はピンと伸びている。痩せ型で灰色の薄い頭髮。細い眉は神経質そうに見える。

彼は窓の外に私の顔を見つけると、微笑んだ。

「お嬢ちゃん、お腹すいてんだろう。入っておいで」

そう声をかけてくる。

これがブルーノさんの家の料理人、レオ・デ・サンティスとの出会いだった。

レオの料理は父のものとは、まったく異なっていた。

まともりがあって優しい父の味に対し、おおらかでエネルギーを感じさせるもの。

それは、何かにつけ彼の料理を味わうようになった私の実感だった。同時に興味がわいた。

父とは違う白衣姿。料理をする彼の背中を見るたびに、うずうずと高揚した気分になった。

父の死後、墓場のように感じていた厨房は、春を迎えたように息吹に満ちた。これこそ魔法の国だ。またここに戻ってこれようとは。

間もなく十三歳になろうとした頃、私はレオに料理を教えて欲しいと申し込んだ。

私にはおそらく他に才能はない。だけど、料理人としてなら、きっとやっていける。腕を磨けばマステイマのコックにだってなれるかもしれない。そう確信めいた思い込みが私を衝き動かしたのだ。

あの夜の事件で、ブルーノさんは脊椎を痛め、やがて車椅子に頼ることになった。そんな生活を少しでも豊かにしようと部下が捜してきたのが、レオだった。

ブルーノさんより七才年上のレオは、ホテルの料理長を退職して間もなかった。何人もの後輩を一人前に育てた実績は伊達ではなかった。

中学校の放課後、駆けつける私を決して子ども扱いしない。彼の信条は、厨房に立てば男も女も若いも老いもないというものだった。最初は掃除や皿洗いに始まり、下ごしらえと徐々にやることがランクアップしていった。

間違ったことをすればマシンガンのようにノンストップで咎められる。弁解の暇なんてない。私はカカシのように突っ立ち、嵐の過ぎ去るのを待つだけだ。

だが、彼の求めに応じることができると、これまた盛大に褒めてくれるのだ。

「お前は天才だな、ミシエル」

私の頭をわしわしとかき混ぜる。三つ編みに結った髪が一気にボサボサになってしまう。

上機嫌に笑い声を上げるレオは、この時ばかりは印象がまるで違う。一見、偏屈な頑固親父のように見えるのに。

飴と鞭は使いよう。まさにその言葉を実践しているような人だった。

レオ以上に私を後押ししてくれたのは、厨房を訪れる、一人の客

だった。

「お腹すいたー。なんかなーい？」

そう言って、駆け込んできて、行き倒れのようにテーブルに突っ伏す。

私の姿を見つけて、顔を輝かせるこの子はソニア。ブルーノさんの孫娘だ。

最近近所に越してきたという彼女は、毎日のように祖父の家を訪れた。彼女曰く母親の料理よりもレオの料理の方が美味しいからだそう。

Tシャツにデニム地のオーバーオールという服装。短く刈られた栗色の髪の毛のせいで、男の子と間違えられることも多いらしい。

ややつり目な瞳とちっともじっとはしていない様子は、イタズラ好きの子猫のようだ。

平均の身長より低く、私より一回り小さい体は、彼女の炎のような気質を覆うには頼りないように見えた。

いつも喧嘩に勝って、誰それを泣かせたと得意げに語っていた。しかもその名前からして、みんな男の子。

彼女の体には生傷が絶えず、服が破れていることもしばしばだった。

「みんな弱っちーもん。敵じゃないよ」

ぱっぱと服をはたきながら、あっけらかんと笑う。頬の絆創膏は勲章みたいなものだ。

私より一つ年下、一人っ子だという彼女は私を姉妹のようだと慕ってくれた。

レオに料理を習い始めて、最初に作った料理を味わってくれたのも彼女だった。

オーダーはミラノ風リゾット。

スプーンが口に入るまでドキドキだったが、ソニアは目を丸くして言った。

「爺じいにも食べさせてあげないと。私だけ食べたら、きっと怒られる

よ」

そう言いながらもスプーンは止まる様子を見せない。一気に食べ上げてしまう。

何よりもの賛辞。あまりの嬉しさに彼女を抱きしめた。

この日から、ソニアは私の試験官になった。

彼女の言葉は率直で、ごまかしがなかった。レオも認める味覚の持ち主で、決して中途半端なことは口にしない。不味いときは不味いとはっきりと言われたし、一口目の表情を見たら分かる。へつらつての二口目なんて決してない。

それでも、美味しいときにはこちらが舞い上がってしまうほど褒めてくれるのだ。

天井を見上げての感嘆の声。「ほっぺが落ちそう」とか「美味しくて死んじゃいそう」とか。

飛び切りの笑顔で料理を頬張る彼女を見るのが、私の一番の原動力となった。

人に喜んでもらえる物を作りたい。当時のことを振り返ってみると、料理人の原点ともいえるその思いは、この頃培われていたように思う。

2. 魔法の国（後書き）

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチ
ッとお願ひします（ランキングの表示はP Cのみです）

3. 悪意ある天使

こうして、ずっとイタリア料理一辺倒だったが、しばらくすると欲が出てきた。それに、マステイマのコックを目指すなら、レパトリリーが多いに越したことはないはずだ。

あるとき、レオが勉強にと連れて行ってくれた、フレンチ・レストランでの料理を口にして決心がついた。

レオは驚いていたようだったが、快く紹介状を書いてくれた。

パリで料理の修業をする手はずを整えてくれたのだ。どうせやるなら、本場で学んだ方がいいというのが彼の意見だった。

もちろん、その頃まだ十五才。学生だったので、夏休みや冬休みなど長期の休みのときだけだ。その間、レストランの一画を仮住まいとさせてくれるということだった。

父親が英国人でよかった。父が生きている頃、家の中では三ヶ国語が入り混じって飛び交っていた。父の英語、母のイタリア語、祖母の日本語。ナチュラルなトライリンガル教育だ。

フランス語はできなかったため、最初は英語と身振り手振りで会話を成立させた。

新たな先生であるジャンは、シェフでありながらも経営者としても有能な人だった。レストランはパリだけでなく、リヨン、マルセイユ、ニースに四店舗を展開していた。

くるくると渦を巻く髪の毛のせいで、本の裏表紙を飾るポートレートは芸術家を思わせた。

ちなみに彼の書いた料理本はかなりの売れ行きらしい。テレビ番組でもコーナーを持っていて、業界どころか巷でも有名人。そんな彼の料理は、質も伴っていて、上品でいて豊潤なもの。

分刻みのスケジュール。多忙な人なので毎日教えてもらえるわけじゃない。だけど、パリに戻った際には、朝一番とか閉店直前とか、少しでも時間を割いて様子を見にきてくれた。

もっぱら指導してくれるのは兄弟子たちだった。

弟子といっても、いつひとり立ちしてもおかしくない立派な料理人たち。私以外の三人はみんな男で、年上であり、妹分として可愛がってくれた。

私は人間関係に恵まれていると思う。嫌いとか生理的に受け付けないとかそういう人が回りにいたことがない。

そんな人は世界の外にいて、私とは関わりを持たない人たちなのだと言っていた。

だが、十七才の夏休み、世の中そんなに甘くないことを知った。私の前に現れたのは、師匠であるジャンの息子のカミュー。

二十歳だという彼は、天使のように見えた。長身で、父親譲りの金色の髪は絵画の天使のような巻き髪で、鼻筋は通り、薄青の瞳は大きくてパッチリとしていた。要するに美男子で彼自身もそれを自認していた。

跡継ぎとして勉強のため、店にやってきたと聞いていたが、私には他の目的でとしか思えなかった。

始まりは店のウェイトレス。

兄弟子の一人との仲を引き裂いてしまった。兄弟子は失望の末、店を去ってしまった。

ひどいことをするとは思ったが、本気ならば仕方がないのかもしれない。そう善意的に考えていたのだが、状況が変わってきた。

その彼女とも長続きせず、他のウェイトレスにも手を出し、ついには女性客にまで及び始めたのだ。

私は彼が好きじゃなかった。自慢の髪を梳きながらの調子の良い語り口。父親の財産をちらつかせる言い草。一度に何人も関係を持ち、それをひけらかす節操のなさに至るまで。

どうしてあんな立派な人の息子がこんな風なんだろう。世の中は理不尽だと思い知らされる。

とにかくこういう人には関わらないのが一番。そっと遠くから見守ろう。そう決めた矢先のこと。

「ねえ、ミシエルはこんな仕事、本当にやりたいと思ってるわけ？
なるべく避けていたのに、ついに火の粉が降りかかった。

「コックは面白いですよ、ロジェさん」

ファミリィネームで言い返す。ファーストネームで呼び合う仲ではない。今までほとんど話したこともないのに。

それに、料理人の息子なのに、父親の仕事を馬鹿にしているような言葉。胸にもやもやしたものが溜まってくる。

「そうかな。割に合わない仕事じゃない？ 朝早くから夜遅くまでなんて。僕の彼女にはそんな仕事はさせたくないね」

なら、どうして厨房なんかに入ってくるんだらう。私は好きでやってるんですと叫びたくなった。

だけど、彼は、師匠にしてオーナーの息子。腐ってもなんとやらというやつだ。

声を上げる代わりに、生ゴミで膨れたビニール袋を手にとった。途端に退く彼の前を抜けて勝手口を目指す。思ったとおり、彼は付いて来なかった。

これで一安心、こちらが気のない素振りを見せれば、相手にだって伝わるはず。そう思っていたのだが、違った。

この日以降、カミィユは何かというと私の傍に来て、自分をアピールし始めた。

話を聞いているうちに頭が痛くなってくる。

高級住宅地にある自宅のこと、ニースにあるという別荘のこと、車庫にしまわれた何台もの車のこと。得意満面で話しているが、それは皆彼の父親のものだ。

軽めに突っ込んでみたが、「いずれ僕のだから」と笑いながら返してきた。

お茶しよう、遊びに行こう、飲みに行こう。断つても言葉を変えて何度も誘って来る。

「私にはお付き合いしている人がいるんですよ」と言ってみても動かない。「ここにいなきゃ、いないのと一緒にだよ」と軽くあしらわ

れた。

こちらの都合なんて聞く耳を持たず。奇妙なプライドが耳を塞いでいるのだろうか。自分に関心を示さない女なんてありえないというような。

「ねえ、僕のなにが気にいらないわけ？」

ある日、とうとうそんなことを尋ねられた。

一人残って最後の片付けをしているときだ。店を閉めるずっと前に姿を消したのに、また戻ってくるなんて思いもしなかった。

私は鍋を磨くことに集中する。この心理的拷問のような状況から逃れるには鍋こすり、つまりは現実逃避しかない。

「どうやったら仕事をしやすいか考えたりしないの、君は」

「……どういう意味ですか、それ？」

私は手を止め、初めて彼へと向く。思わせぶりに目を細めた姿はもう天使とはほど遠い。口元に浮かんでいるのは意地の悪そうな笑みだ。

「別に。頭を使ったら分かることだろ」

自分になびかない女は愚かだとも言いたいのだろうか。

彼の思考回路はまったく分からなかったし、理解したくもなかった。私は小首を傾げただけで返すと、磨いた鍋を棚に戻し、今度は包丁を引っ張り出した。

刃の様子を翳して曇りを見る。後ろに気配がまだあるので振り返った。

カミューは滑稽なほどに慌てて距離をとった。私がキレて、これでブスリとやるとでも思ったんだろうか。大事な調理用の包丁をそんなことで台無しにするわけがないのに。

これまた自前の砥石を取り出して、刃を砥ぎ始めると、さすがに諦めたらしい。足音が遠ざかっていった。

ふうと息をつく。料理を学ぶためにここに来たのに、これじゃ集中できない。そうでなくても夏休みの間の短期決戦。ほかの事に気持ちを割いている余裕はない。

前途は多難だと思わざるを得なかった。

3. 悪意ある天使（後書き）

お話を気に入っていただけでしたら、下のランキングの文字をポチ
ッとお願ひします（ランキングの表示はP Cのみです）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2842y/>

運命のマスティマ ミシェル過去編

2011年11月20日21時41分発行